

誰と一緒にいてもらいたいの（『若き日の芸術犬の肖像』から）

A Translation of “Who Do You Wish Was With Us ?”
from Dylan Thomas’s *Portrait of the Artist as a Young Dog*

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

2008年10月2日受理

クレセントの森で鳥が歌っていた。少年たちが自転車に乗って、ベルを鳴らし、緩やかな斜面をペダルをこいで降りていった。車輪をブーンとうならせ、日の当たった戸口の階段でべちゃくちゃしゃべっている女どもに驚きの声を上げさせた。少女たちは、弟、妹を乳母車に乗せ、歩道を押して回る。きれいな色のリボンを付け、夏の一番いい服を着ている。近所の湧垂れ小学校からやってきた子どもが、公園の丸ブランコに乗って、ぐるぐる回り、声を上げ、気分悪くなる。「揺らしてよ。」「揺らしてよ。」「わあっ、落ちるよ。」と叫ぶ。その朝、レイモンド・プライスとぼくは、帽子をかぶらず、フラノのズボンに、杖〔訳注：後に出てくる「けんか用の杖Irish stick」のこと。ちょうどチャンバラの刀のようなもの。Irish stick fightingという競技もある。〕と雑嚢をしょって、ワームズ・ヘッド〔訳注：ウェールズ南部、Gower（ガウアー）半島にある、龍の頭のようなふたつの島〕へと徒歩旅行にくり出した。まるでなにか、国際労働者の年、節目の年かなにかのように、いつもと違って晴れていた。アップランドの四角い住宅地を、脚を揃えて歩いていくと、ナイフの刃のような折り目の白シャツに、けばいブレザーを着た若い男たち、それから足首の細い女たち、首にはタオルを巻き付け、セルロイドのサングラスをかけている。そいつらに出くわした。杖でポストを叩き、ガウアー行きバスを待つ旅行者の群れの中を威張り散らしながら歩き、ランチボックスに足を踏み入れようが、かまいはしなかった。

「なんで、あいつらバスに乗りたがるんだ。歩けよ。」レイが言った。

「疲れてるんだよ。」ぼくが応える。

スケッチャー・ロードを急ぎ足で登り、雑嚢が背中を踊った。家々の門をみな叩いて、息詰まる家の中にいる奴らに、我ら徒歩旅行者の祝福を与えてやった。ピン・ストライプのビジネス服の男、犬の鎖を手を持っている。そいつの横を、春の息吹のように、曲がり角で口笛を吹いて、通り過ぎた。肩を揺らし、しなやかな手足を大股に、体中から都会の音とおいを発散させて、道を半ば上ったところで、ピクニック途中の女たちが、「マットとジェフ〔訳注：アメリカの新聞漫画の登場人物〕じゃない。」と呼びかけてきた。レイは痩せて背が高く、ぼくはずんぐりだった。大型遊覧バスからリ

ボンが何本も伸びていた。レイはブルドッグ型のパイプを吹かし、急ぎ足で歩いて、手も振らなかったし、笑いもしなかった。上り坂の向こうで球転がしをやっていた若い女たちの中に誰かがいたようにぼくは思った。紙帽子をかぶった、未来の恋人。この遠出の背後にはその姿、樽に近い姿があったのかもしれない。でもいつも通っている道から外れ、海岸の方へ軽快に歩いていくと、その顔も声も忘れてしまった。女の顔は夜の間に想像したものだったからだ。そして田舎の空気を胸いっぱい吸い込んだ。

「空気が違うよな。吸い込んで見ろ。田舎みたいだ。海のおいも混じっている。吸い込んでみろ。ニコチンも吹き飛ばせ。」レイが言った。

レイはつばを手のひらに吐き出した。「まだ街の汚れが。」

レイは、またそのつばを口の中に戻した。それからぼくたちは顔を上げて歩いていった。

ようやく街から三マイルほど離れた。共有地のはずれに来る頃になると、トタン屋根のガレージがそれぞれに付いていた、それまでの二軒長屋があまり見えなくなった。裏庭に犬小屋付きで、きれいに刈りそろえた芝。ときには棒の先にココナツを下げ、鳥の水浴び用水盤やクジャクが羽を広げたような茂みのある家もあったのだが。

レイは立ち止まり、ため息をついて言った。「ちょっと待ってくれ。パイプを詰めるから。」嵐の中のように、レイはマッチを構えた。

赤い顔で、眉を汗で濡らし、ぼくたちは顔を見合わせて、にやっと笑った。この頃にはふたりで学校を抜け出した生徒のように、気持ちは親密なものになっていた。ぼくたちは脱走しているのだ。あるいは自尊心といたずら心で、何が起こるか予想もつかない田舎へと連れて行ってくれる通りをぬけて、横柄な気持ちで、歩いているのだ。店のウィンドウが輝くこともなく、草刈りの歌声が鳥の声より大きくなることもなく、日の光の中を歩くのは運命に逆らっているように思えた。鳥の糞が塀の上に落ちた。街がどのようなものかを知っている眼にはひとつの見物^{みもの}だった。羊がめえーと言いながら、姿を消した。アップランドが見えてくるだろう。ぼくには何が見えてくるのかはわからなかった。

「ウェールズの荒野を歩く二人の放浪者だな。」レイが片目をつぶって、言った。セメントを積んだトラックがぼくたちを追い抜き、ゴルフ場へと向かっていった。レイはぼくの雑嚢を叩いて、背筋を伸ばした。「さあ、行こう。」ぼくたちはさっきより足早に、丘の上へと歩いていった。

自転車の集団が道ばたに集まっていた。紙コップでサイダー〔訳注：原文はdandelion and burdock。紫色の炭酸飲料〕を飲んでいて、藪の中に空き瓶が数本転がっていた。男たちは袖無しシャツに短パンだった。女たちはクリケット用のオープンシャツと男物の灰色の長ズボンだった。裾を安全ピンで留めていた。

「あんた、後ろに一人乗れるわよ。」二人乗り自転車の女がぼくに言った。

「はやりの結婚というわけにはならんだろうよ。」レイが言った。

「素早かったな。」自転車乗りたちから離れて、ぼくはレイに言った。男たちは歌を歌い始めた。

「おお、こいつはいいや。」レイが言った。ヒースが広がる共有地を抜けてほこりっぽい道にやってきた。最初の上り坂でレイは手を眼にかざして、周りを見渡した。煙突のように煙を吐き出し、けんか用の杖で遠くの木立とその間に広がる海を指した。「向こうがオックスウィッチの入り江だ。でもおまえには見えんだろう。あれが農場だ。屋根が見えるか。見えない、あそこだ。指の先を見てみろ。これがウェールズの生活だよ。」レイは言った。

ぼくたちは並んで、低い土手を叩き、道の真ん中を降りていった。レイはウサギがいるぞと言った。「これが街の近くだなんてとても思えないよ。野生だ。」

ぼくたちは名前のわかった鳥を杖で指し、残りは名前をでっち上げた。カモメとカラスが見えた。カラスはミヤマガラスなのかもしれない。ぼくたちが鼻歌を歌い、早足で行っているとき、ツグミとツバメとヒバリが上を飛んでいるとレイが言った。

レイは立ち止まって、草の葉を抜いた。「これは麦だよ。」と言って、パイプと一緒に啜えた。「ああ、空は青だ。こんなものがみんな周りにあるのに、おれはグレート・ウェスタン鉄道にいる。自分自身の姿を見るために苦しんできたなんて、おまえにはわからないだろう。おれは何でもできる。牛を追うことも、畑を耕すことも。」

父親も、姉も、弟も、みな亡くなっていて、母親は関節炎で足がきかず、一日中車椅子に座ったきりの生活をしている。レイはぼくより十歳年上だった。顔にはしわが寄り、骨張っていて、口元は縮まっていたが、ゆがんでいた。上唇は隠れていた。

ぼくたちは午後の日差しに照らされながら、長い道をずっと歩き続けた。両側には何マイルにもわたって、熱気の中に、共有地が広がっていた。のどが渇いて、

眠たくなかったが、足はゆるめなかった。すぐに自転車の集団が追いついてきた。三人の男に三人の女、二人乗り自転車の女、みんな笑って、ベルを鳴らした。

「ご自身のロバの歩みはどうだい。」

「帰りは送るよ。」

「ずっと歩くのかい。」

「松葉杖で歩くのと同じだろう。」自転車たちは言った。

それからみんなは行ってしまった。ほこりがまた舞い降りた。自転車たちの鳴らすベルがずっと向こうの森の中からかすかに聞こえてきた。荒れた共有地は街から六マイルほど離れていて、人影もなく、広がっていた。木の下でブヨを追いかけるため、ぼくたちは懸命にたばこを吸った。木に寄りかかり、大人のように話した。目の前には人が足を踏み入れたことのない荒地が広がっていた。ぼくたち以外には誰もここに来たことがないだろう。

「カーリー・パリーを憶えているか。」

ほんの二日前、ビリヤード場で見かけたばかりだった。えくぼの顔は、思い浮かべているのに、この徒歩旅行の色のなかに、道の灰白色、周りのヒース、青々とした野原、時折見える海の色にかすんでいった。その愚かな声も、鳥たちの立てる音、風もないのに動く葉っぱの音にかき消されてしまった。

「今何やってるんだ。もっと戸外に出なきゃだめだな。まったくの都会人だからな。ここにいる自分の姿を見ろよ。」レイは木や葉越しに見える空をパイプで指した。「ハイ・ストリートと交換しようと言われても換えないな。」

ぼくはその場所の自分の姿を見た。少年、若者、しかめ面、奇妙な日焼け、都会生活のために顔色が悪い、大急ぎで歩いて、息を切らせ、昼を過ぎてすぐの時間に森を出てたたずんでいる。レイの眼の中にはいつも見ない幸福感があふれていた。ぼくの目にはありえない友達としての気持ちが見えていた。レイは、田舎の風景に思いをはせ、あるいは指を差したりするたびに、それまで自分の身に起きたことを全部違うと言った。ぼくはぼくで自分が望む以上に愛を感じていた。

「そうだよ。ここにいるぼくたちを見てみるんだ。ぐずぐずしているぼくたちを。ワームズ・ヘッドは十二マイルも先だ。レイ、電車の音が聞きたいと思わないかい。あれはモリバトの声だよ。ほら、スポーツ特別版に乗って、あいつらが通りに出ているぜ。賭けだ、賭けだ。きっとカールは赤に賭けている。ほら、ほら。」

「右を見てみろ。」レイが言った。「くそっ。あのうわさ話を憶えているか。」

ずっと向こう、森を出たあたりと、見回していると、二階バスがすぐ後ろで、うなりを上げていた。

「ロッシリ行きバスだ。」

ぼくたちは二人とも、杖を出した。

「なぜバスを止めるんだ。」二階に座ると、レイが言った。「今日は歩きに来たんだろう。」

「あんただって、止めたじゃないか。」

ぼくたちは前の方に、運転手のように陣取った。

「轍かたは気になるかい。」ぼくは言った。

「揺れてるじゃないか。」

ぼくたちは雑嚢をあけて、固ゆで卵とミートペーストを挟んだサンドイッチを分け合い、魔法瓶から交互に飲んだ。

「戻っても、バスに乗ったとは言わないだよ。」ぼくは言った。「一日歩いたことにしよう。ほら、オックスウィッチの入り江だ。遠くはないみたいだよ。今頃ひげを生やしていただろうに。」

バスは、丘を這うように登っている自転車を追い越していった。「引っ張ってやろうか。」ぼくは叫んだ。聞こえなかった。二人乗り自転車の女の子はずっと遅れていた。

弁当を膝の上に広げたまま、ぼくたちは運転を忘れ、下の階にいる本物の運転手が、スイッチバックの道の好きなところを好きなように走るに任せた。すると灰色の教会堂と、雨風にさらされた天使像が見えてきた。海から離れた丘のふもとはかわいらしいピンクの別荘が見えた。住むにはぞっとすると思った。車と人のひしめく街路や屋根に煙突の立ち並ぶ街よりも、木々も草にもっとしっかり閉じ込められてしまうだろうから。それから給油ポンプ、干し草堆、溝の中で立ち往生している馬車馬に乗った男も見えてきた。はえがたかっていた。

「こうやって田舎は見るもんだよ。」

バスが狭い丘の上の上まで来ると、雑嚢を背負ったふたりの男たちを生け垣の中に押し込んだ。男たちは身体を隠し、腕を振り上げ、声を上げた。

「歩いていたら、あんなになったろうよ。」

生け垣の男たちをぼくたちはうれしい顔で振り返った。ふたりはまた道に戻り、のろのろと歩みを続けた。そしてだんだん小さくなった。

ロッシリの入り口で停車ボタンを押し、バスを止め、はねるような足取りで村の方へと二、三百ヤード歩いた。

「だいふ時間がかかったな。」

「記録だよ。」

金色の浜辺が長く続くのが見える丘で、ぼくたちは、まるで相手の目が見えないかのように、お互いにワームズ・ヘッド犬岩がどこにあるかを言って、声を出して笑った。海が広がっていた。つるつるの石を飛び越えて、ようやく風の吹く頂上に得意顔で立った。草がぼうぼうと生い茂っていた。笑い、飛び跳ねていった。羊がびっくりして、草の倒れたところを山羊みたいに右往左往した。どんなに穏やかな日も、ワームズ・ヘッドには風が吹いていた。ひよろ長いこぶこぶした身

体の先には、見たこともないくらいの数のかもめが自分たちの、また昔からの糞の上で鳴いていた。突端まで来ると、ぼくの静かな声はひしゃくですくい取られたように大きくなり、うつろな叫びとなった。まるで周りの風がドームか丸い天空と同じような高くて大きな、触れることのできない屋根と壁のある洞窟を形作ったみたいだった。カモメの羽ばたきが雷の音のように聞こえた。足を広げて、片手を尻に当て、サー・ローリーのように手を額にかざしてそこに立った。寝付きの悪いとき、身体がびくびくと震えるような感じになる。そうしたときには、脚が伸びて、夜の闇の中へと芽を出すのだ。心臓はぼくぼくいて、隣人を起こす。ぐんにゃり曲がった部屋の中で息は台風のように。空と海の上に浮かんだ大きな岩の上で、小さくなることもなく、自分が息をする大きな建物のように感じた。ただレイだけがつぎのような、ぼくのすばらしい吠え声に対抗できるのだった。「どうしてぼくたちはここにずっと住まないのだろう。ずっと、ずっと。どえらい家を建てて、どえらい王様みたいに暮らすんだ。」ぼくの吠え声は、ぎゃあぎゃあ鳴いている鳥たちに届き、鳥たちはその声を、バタバタいう羽音に乗せ、突端へと運んでいった。レイはひとつ離れた岩の上で、小躍りし、杖でそこら中を叩き回った。杖は蛇にも炎にも変わる。ゴムのよう、カモメの糞で白くなった草、羊毛の丸い玉が転がっている石、骨や羽の転がっている地べたにぼくたちは寝そべった。ずっとじっとしていたので、灰色の汚いカモメが静かに降りてきて、何羽かは近くに舞い降りた。

それからぼくたちは食事を終えた。

「ほかの場所とは違うよね。」ぼくは言った。ぼくはまたもとの大きさに戻っていた。五フィート五インチ〔訳注：約167cm〕、八ストーン〔訳注：約50kg〕で、声もどろく空へと広がることはなかった。「海の真上みたいだね。ワームズ・ヘッドが動いているみたいだ。だろ。アイルランドまで動かして行ってよ。イエイツに会って、ブラーニーの石〔訳注：アイルランドBlarney Castleにある石〕にキスもできる。ベルファストで一試合もできる。」

レイは岩の端で、場違いな顔をしていた。くつろぎもしなかったし、日を浴びてのんびりするとも、ごろっと転がり、海への崖をのぞき込むこともなかった。まるで堅い椅子に座るようにただじっと座って、手持ちぶさただった。杖をおとなしくいじり、その日の出来事がきちんと整理できるまで、ワームズ・ヘッドが道を延ばしてくれるまで、手すりかざざざの突端へと伸びるまで待っていた。

「街の人間には合わないだろ。」

「おまえこそ街の人間だよ。バスを止めたのは誰だ。」

「止めて良かったろ。でなきゃフェリックスみたい

にまだ歩いているよ。このあたりの雰囲気は嫌いなふりをしてるだけさ。岩の端で踊っていたよ。」

「ほんの一、二回だけな。」

「なんだか知っているよ。家具が嫌いなんだろ。ソファも椅子も十分ないし。」ぼくは言った。

「自分では田舎育ちと思っているだろ。でも牛と馬の区別も付かないだろ。」

ぼくたちは口論を始めた。すぐにレイは自宅に戻った気分になって、単調な戸外のことを忘れた。もし急に雪が降ったとしても、それもレイは気づかなかつたろう。自分の周りに壁を作り、岩も、レイにはブラインドを下ろした家と同じように暗くなった。鳥に向かって踊り、吠え声を上げていた、空にそびえる姿も、窪地でささやく二人の街の人間となって、こそこそと隠れた。

ぼくは、レイが頭を下げ、肩を上げる様子で、何が起きるかがわかった。レイは首のない人間のようにになって、そうやって歯の間から息を吸うのだ。ほこりをかぶった白い靴を見つめていた。ぼくはレイが想像力を働かせてそれをどんな形にしているかがわかった。それはベッドに横たわる死体の足だ。そうしてレイは弟のことをしゃべろうとしていた。フェンスにもたれて時々サッカーを見ているときなんか、レイは自分の細い手を見ることがあった。レイは手をどんどん細くするのだ。傷付きやすい皮膚を通して骨が見えている弟ハリーの手を見ながら、肉を削っていくのだ。もし周りの世界が失われてしまったら、もしぼくがレイのそばを離れたら、もしレイが下を向いたら、現実の堅いフェンス、あるいは熱くなったパイプの先から手を離れたら、ハンドベルの音を聞きながら、タオルと洗面器を持ってぞっとする寝室へと戻っていくことだろう。

「こんなにたくさんのカモメは見たことがないよ。」ぼくは言った。「レイ、君はどうだい。こんなにたくさんの。数えてみようか。ほら二羽がけんかしている。上で鶏みたいにつつき合っている。大きい方に何を賭けるかい。汚いくちばしのやつめ。あれの食事、羊と死んだカモメの料理はぜったい食べたくはないね。」ぼくは「死んだ」という言葉を使ったことを忌々しく思った。「今朝、街は明るくはなかったかい。」

レイは自分の手を見ていた。もう止められなかった。「今朝、街は明るくはなかったかいだって。みんな夏の服を着て、声を出して笑ったり、にこにこしていたな。子供は遊んで、みんな元気いっぱいだった。音楽隊が繰り出すくらいだった。親父が発作を起こしたときには、ベッドに押しえつけていたもんだ。弟のためにシーツを日に二回換えなくてはならなかった。何にでも血が付いているんだ。弟がだんだんやせていくのをじっと見ていたさ。それで最後には片手で抱えられるくらいになった。弟の嫁は弟が顔にまともにせきを

吹きかけるというので、決して病室に入らなかった。お袋は動けないし。おれは食事の用意もしなくてはならない。用意をして、守りをして、シーツを換えて、親父が狂ったときには押しえつけていなくてはならなかった。それで顔つきがこんなになったんだ。」レイは言った。

「でも散歩が好きなんだらう。共有地を歩いているときは楽しかったらう。レイ、すばらしい日だよ。弟さんのことは気の毒だ。このあたりを探ってみようよ。海まで降りてみよう。たぶん、有史以前の絵が描いてあるよ。論文を書いて、ひと財産ができるよ。さあ、降りてみよう。」

「弟はおれを呼ぶのにベルを鳴らしたんだ。ささやく声しか出なかった。こう言ったよ、『兄さん、ぼくの脚は昨日よりやせただらう。』」

「もう日が暮れる。さあ降りよう。」

「ベッドに押しえつけると、親父はぼくに殺されると思っていた。死んだときも押しえつけていたんだ。親父はしゃべり続けていた。お袋は台所に座っていた。でも親父が死んだことがわかって、妹を大声で呼び始めた。ブレンダはクレイギナス〔訳注：Swanseaの谷間にある土地〕の保養施設にいたんだ。お袋が叫び始めたとき、ハリーがベルを鳴らした。でもぼくは弟のところへは行ってやれなかった。親父がベッドで死んだからね。」

「海まで降りるよ。来るかい。」ぼくは言った。

レイは窪地からまた出てきて、ぼくの後をゆっくりついてきて、ヘッドの突端を越えて、険しい崖を降りた。カモメが一斉に舞い上がった。ぼくは乾いた花穂につかまっていたが、根が取れてきた。足許が崩れた。手探りすると、割れ目は砕けた。ぼくは黒い平らな岩に這い上った。その突端はワームズ・ヘッドの小型版みたいに、少し離れたところで、曲がりながら海からつきでていた。危険だった。飛びかかってくる水に濡れながら、ぼくはレイの方を見上げた。小石がばらばらと落ちてきた。レイはぼくのそばに降りた。

「だめだと思ったよ。」震えを止めると、レイは言った。「一瞬のうちにこれまでのことが思い浮かぶくらいだった。」

「全部かい。」

「ほとんどな。おまえの顔と同じくらいはっきり、弟の顔が見えた。」

ぼくたちは日が沈むのを眺めた。

「オレンジみたいだな。」

「トマトみたいだ。」

「金魚鉢みたいだ。」

太陽を描写して、ぼくたちは相手より良いたとえを言い続けた。海はぼくたちのいる岩にたたきつけた。ズボンを濡らし、ほほに刺さった。ぼくは靴を脱いで、レイの手を取って、両足を海の水にひたすように岩を

腹ばいで滑り降りた。するとレイが滑り落ちた。レイが水を蹴り上げている間、ぼくはしっかりと支えた。

「こっちへ来いよ。」手を引っ張りながら、ぼくは言った。

「いや、いや。これは気持ちがいいよ。もうちょっと足を浸させてくれ。風呂みたいに暖かい。」レイは足を蹴って、ぶつぶつ言い、もう一方の手で逆上したように岩を叩いた。おぼれる振りだった。「助けなくていい。おぼれるよ。おぼれるよ。」

ぼくはレイを引っ張り上げた。レイはばたばたと身体を動かし、そのうち靴の片方が岩にこすれて脱げた。ぼくたちは手探りして、探し出した。水がいっぱいだった。

「構やしないよ。それくらいのもんだから。六つの時から泳いだことはない。どれほどおもしろいか言えないくらいだ。」

レイは父親や弟のことを忘れてしまっていた。でも今、暖かくて荒い海の水と戯れてはいるが、これが過ぎれば、レイはまた苦しみっぱいの家に戻るのだ。そして弟がやせていくのをまた思い描くのだ。ハリーが死んだことは何度も聞いた。気が狂った父親はレイ自身より、なじみ深くなっていた。せきも叫び声も、ひっかこうと伸ばした腕も、みんなぼくは知っていた。

「これから一日一回はバタ足をするにしようよ。毎夕、浜辺まで降りて、バタ足をしよう。ばちゃばちゃやって、膝まで濡れるよ。誰が笑っても構わない。」レイは言った。

レイはじっと座って、少しの間このことをまじめに考えていた。「朝起きてても、何も楽しみがないんだ。土曜日以外はね。それからおまえの家に辞書を借りに行くとき以外はね。死んだ方がましだよ。でもぼくは起き上がって、こう思うこともできる、『夕方には海でバチャバチャと泳ごう。』もう一度やるよ。」レイは濡れたズボンをもたまくり上げ、岩を滑り降りた。「離さないでくれよ。」

レイが水の中で足を蹴っているとき、ぼくは言った。「この岩は世界の果ての岩なんだ。いるのはぼくたちだけだ。レイ、みんなぼくたちのものだ。気に入ったものを周りに侍らせ、いやなやつは遠ざける。誰にそばにいてほしいかい。」

レイは水かきに忙しく、答えなかった。バチャバチャ足をばたつかせ、ふうふう鼻を鳴らし、まるで顔が水の中に潜ったように息を吹き、ぐるぐると回って見せたり、足先で水の表面をかきならしたりした。

「この岩の上に一緒にいてほしいのは誰だい。」

レイは溺死体のように手足を伸ばして浮かんでいた。足は水の中で動かず、唇が水面に浮かんでいた。手はぼくの足を握っていた。

「ぼくはジョージ・グレイにいてほしい。ロンドン出の男で、ノーフォーク通りにやってきて住んでいる。

君は知らないだろう。今までで一番興味をそそられる人物だよ。オスカー・トマスより変わっている。あれほど風変わりには誰もなれないと思ったね。ジョージ・グレイはめがねをかけてるんだが、ガラスが入っていないんだ。縁だけだよ。近づかないとわからないんだけどね。何でもやってきたそうさ。ねこ医者をやっている、ある女の身支度を手伝いに、毎朝、スケッチのどこかに出かけるんだ。その女はやもめのばあさんで、まあそういうことになっている、自分では服を着られないんだ。どうやって知り合ったのかは知らない。まだやってきてひと月なんだ。ジョージ・グレイは文学士でもあるんだ。ポケットに入れているものときたら。毛抜きにはさみ、それからたくさんの日記。その日記を読んでくれたよ。ロンドンでやっていた仕事のことだった。婦人警官と寝ていたそうさ。そしてその女が金を払う。制服のまま寝ていたというんだ。ああいう変なやつには会ったことがないよ。ジョージ・グレイが今ここにいてくれたらなあ。レイ、きみは誰といたいかい。」

レイはまた足を動かし始めた。後ろにまっすぐ伸ばして、強く水を叩いていた。それから水をかき回した。

「ギリムもいてくれたらなあ。」ぼくは言った。「ギリムのは前に話したろう。海に説教をたれてくれるよ。ここがその場所にふさわしい。こんなに寂しい場所はないからな。おお、愛すべき日没。おお、恐ろしき海よ。船乗りたちに哀れみを。罪を犯したものに哀れみを。レイモンド・プライスとぼくに哀れみを。おお、雲がやってくるように、夕暮れがやってくる。アーメン、アーメン。レイ、誰にいてほしい。」

「おれは弟にいてほしい。」レイは言った。岩の平坦なところまで登ると、レイは足を乾かした。「ハリーがいてくれたらいいと思う。ここにいてほしい、今、この岩の上に。」

太陽はほとんど沈みかけていた。陰になった海に半分隠れていた。冷気が海からしぶきのように、登ってきた。ぼくはそれ用の身体になることもできた。氷のような角、水をしたたらせるしっぽ、魚が泳ぎ渡るさざ波を立てる顔。ワームズ・ヘッドを回ってきた風がぼくたちの着ている夏シャツを冷やした。潮がもう岩のところまで満ちてきていた。ぼくたちの岩には友達がいっぱいだった。生きているものも、死んだものも。闇から逃れるように急いであつまってきた。ヘッドを登るとき、ぼくたちはしゃべらなかつた。ぼくは思った。「口を開いたら、二人ともこう言うだろう、『もう遅い、遅すぎる。』ぼくたちは草を飛び台にして、駆けた。岩が足に擦り傷をつけた。針のようだ。レイが血のことを話した窪地へと降りた。草の葉がさらさら音を立てる丘を登った、そして草ぼうぼうの平地を走った。そしてワームズ・ヘッドの入り口にぼくたちは立って、見下ろした。二人とも見ないでも海が満ちてい

ることはわかったのだけれど。

海は満ちていた。あの平らな滑り石は見えなくなっていた。黄昏時の陸地の方で何人かの小さな姿が手招

きをしていた。七人の人物がはっきり見えた。飛び上がり、声を上げていた。自転車乗りたちだとぼくは思った。